

## 首藤次男先生のご逝去を悼む

松隈明彦



写真. 首藤次男九州大学名誉教授 (1921–2014)

日本古生物学会名誉会員で、長年にわたり特別号の編集に尽力された首藤次男先生（九州大学名誉教授）が、2014年10月6日、ご自宅で老衰のために逝去されました。享年93歳でした。野外調査を好み、教育と研究に真摯に取り組んでこられた先生のご活動をここに記し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

首藤先生は1921年（大正10年）に大分県で生まれ、旅順工科大学予科を経て同大学鉱山学科へ進み、終戦後、九州大学理学部地質学科に入学されました。同大学理学部助手、講師、助教授、教授を経て、1985年に定年退官されました。退官後も応用地質(株)の顧問として、若い社員の野外調査等の指導を精力的に行われました。

先生は古生物学（古生態学・分類学・生層序学）・第四紀学を専門とされ、取り扱われた対象とその時代・地域は、花粉（第四紀、九州）、有孔虫（第四紀～現生、九州）、軟体動物（古第三紀～現生、分類・遺骸群集古生態、西太平洋）、生痕（古第三紀、九州）、段丘・活断層（第四紀、九州）など多岐にわたります。先生の代表的な研究は、首藤（1952）：宮崎層群の地史学的研究（九大理工研報，地質学之部，第4巻）に始まる一連の宮崎層群の地質学的・古生物学的研究です。綿密な野外調査に基づいて宮崎層群各層を定義し、層序関係を明らかにするとともに、腹足綱・二枚貝綱の多数の種について、科や超科単位で分類学・進化古生物学的検討を行い、*Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society*

of Japanを初め *Japanese Journal of Geology and Geography* 等各種専門誌に発表されました。これらの仕事により、後に西日本文化賞を受賞されました。

先生は科研費の海外学術調査（The Geology and Palaeontology of Southeast Asia）に参加されて、新生代軟体動物の分類並びに生層序学に関する論文を発表されました。Shuto, T., 1969: Neogene gastropods from Panay Island, the Philippines (*Mem. Fac. Sci. Kyushu Univ., ser. D*, vol. 19(1): 1–250), Shuto, T., 1971: Neogene bivalves from Panay Island, the Philippines (*Ibid., ser. D*, vol. 21(1): 1–73) 及び Shuto, T., 1982: Miocene molluscs from the Macasilao and Paghunayan Formations, Negros Island, the Philippines (*Geol. Pal. Southeast Asia*, vol. 23: 163–189) は、東南アジアから南西日本の新生代並びに現生海産腹足綱・二枚貝綱の分類学的研究にとって不可欠な重要な文献です。錦江湾内の新島（燃島）の半化石を取り扱った Shuto, T., 1965: Turrid gastropods from the Upper Pleistocene Moeshima Shell Bed (*Mem. Fac. Sci. Kyushu Univ., ser. D*, vol. 16(2): 143–207) や、その後、貝類学会誌 *Venus* に発表されたクダマキガイ科腹足類の分類学的再検討は、当時アムステルダム大学熱帯博物館が保管していた Siboga Collection 中の Matthews Marinus Schepman 記載のクダマキガイ類の模式標本を借り出して、Wild の双眼実体顕微鏡で観察し、描画装置を用いて原殻をスケッチする丁寧な仕事でした。原記載と模式標本を調べて手元の標本を同定する手法は、形態分類学の基本であり、私達が軟体動物分類学を志すきっかけとなりました。

一方、腹足類には Volutidae や Buccinidae のように個々の種の分布域が狭く、局所的であるものが存在する半面、Ranellidae のように太平洋から大西洋まで汎世界的に分布するものがあります。腹足類の浮遊幼生期の貝殻（原殻）のサイズや巻き数、彫刻と浮遊期間の関係を調べ、分布のパターンを論じた Shuto, T., 1974: Larval ecology of prosobranch gastropods and its bearing on biogeography and paleontology (*Lethaia*, vol. 7: 239–256) は、生物地理や種分化を議論する上で、今でも世界各国の多くの研究者に引用される重要な論文です。先生の研究を引き継ぎ、更に発展させる弟子が現れなかったことは、残念なことです。

先生が収集された軟体動物標本には、新生代化石のほかに、海外調査などの機会に採集されたタイ、フィリピンなどの現生貝類標本があります。新生代化石標本（約3,000点、完模式標本133点、副模式標本580点を含む）には以下のようなものがあります：漸新世杵島層、山鹿層（佐賀県西松浦郡有田町応法、長崎県北高来郡古賀村向・戸石村園田平、長崎県西彼杵郡伊王島村伊王島大明寺・長与村、福岡県遠賀郡芦屋町田屋）、宮崎層群（宮崎

県), 更新世若松層正津浜泥層 (福岡県遠賀郡芦屋町山鹿柏原), 更新世燃島貝層 (鹿児島県新島), 鮮新世苗栗層 (台湾苗栗), Pleistocene Pucangan Formation (Sangiran, east Java), Miocene Macasilao Formation (Negros Island, Philippines), Miocene to Pleistocene Dingle, Ulian and Cabatuan Formations (Panay Island, Philippines). これら化石及び現生標本は, 先生の退官後, 下山正一氏, 梶原忠裕氏らによって整理されました. 目録としては梶原・松隈 (2005): 九州大学所蔵軟体動物標本目録 (1) 首藤次男九州大学名誉教授採集新生代軟体動物化石標本 (九大総合研究博物館研報, 第3号: 107-206) があります. データベースは九州大学総合研究博物館により公開されています (<http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/database/index.html>). なお, 標本の閲覧は理学部が新キャンパスへ移転し, 標本が九州大学総合研究博物館へ移管されてから可能になる予定です.

1950年代から日本では古生物学における種の概念が, 類型分類学的種から, 生物学的 (遺伝学的) 種へと変わり始めました. 先生は一連の宮崎層群産軟体動物化石の

研究で, *Crassatella* 属や *Paphia* 属の化石個体群中に形態的に不連続な変異を発見されました. これらを同所的亜種 (*Crassatella tenuilirata tenuilirata*, *C. t. triangularis*; *Paphia exilis exilis*, *P. e. abbreviata*, *P. e. takaokaensis*, *P. hirabayashii hirabayashii*, *P. h. tanoensis*) とされたことに関しては, 当時の大学院生と種 (亜種) の定義を巡って熱心に議論されました. 先生は従来 of 類型分類学者のように種を固定的なものと考えず, 同所的集団の個体変異の集合と捉えていましたが, 生物学的 (遺伝学的) 種の定義は当時の我が国にはまだ十分に根付いていませんでした. そのような時代的背景の中で, 個体変異を量的に表現しようとする努力が, 古くは京都大学榎山次郎先生によって行われ, 首藤先生や東北大学小高民雄先生も真剣に取り組んでおられました.

先生は, 様々な分野で活躍し, 多くの学生を指導し, 社会へ送り出してこられました. 93歳という長寿を全うされた先生のご冥福を, 弟子の一人として心からお祈り申し上げます.

